
アジアンブルー ～通条花と緑泥石～

愛瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アジアンブルー〜通条花と緑泥石〜

【Nコード】

N4535G

【作者名】

愛瑠

【あらすじ】

強大な力を手にした少女の見た世界それは・・・

プロローグ

この世界は昔、5の国から成り立っていた。
黄龍国、青龍国、赤龍国、白龍国、黒龍国。よって五龍国と呼ばれる。

そして色の名を持つ龍神が支配していた。黄龍、赤龍、青龍、白龍、黒龍である。

しかし、建国から1万年後この均衡が崩れた。

黄、赤、青、白龍と黒龍が対立し乱世となったのである。

百年争った神々の戦いは、ある日突然終わりを迎える。

黄龍を始めとする四神が力を一つにするため己の体ごと青龍の中に吸収させ、そのあまりにも強い力で黒龍を封印し、新しい黒龍を擁立したのだ。

そして勝国として新しい黒龍にいくつか条件を提示した。曰く

『黒龍に60年以上の命は与えない』

『黒龍国の国民は、許可無く青龍国へ入国してはならない』
という条件を出した。

これにより、この世界に格差が生まれ2つの国から成り立つこととなった。

青龍は強大な力を手に入れその力を己の跡を継ぐものに託した。

その力を託された者こそ、

最高神となった2代目青龍である。

【龍国書】

第1章 初冬の花

「今のうちに……国の力をそぐべきですな。」

「さよう。そのために緑龍国を建国するのだ。」

「不備があつてはならんな。」

「ではやはり……」

「ああ我々が手を回さねば」

密やかな会議は夜の闇に消えていった。

サクツサクツと霜を踏み、秋葉は桶を片手に、水汲み場へ向かう。

神々の大戦乱があつたとされる年から今年で何億年たったのだろうか。

今青龍国と黒龍国はぎくしゃくしてはいるが、それなりの友好を築き、平穏が保たれている。

だが未だ黒龍国の土地は痩せ作物のできが悪い。おまけに特産物が少ないため市場に活気がない。

はあと白い息を吐き桶に水を汲む。

その時息をきらして誰かが走ってくるのが見えた。

「秋葉っ！おはよう！！手伝うわ。」

声の主は秋葉が仕える黒龍神一族の遠縁の名門、静家の令嬢、流花である。

「流花様……。なんだってこんな早くに起きてここへ来るんです

「家令達が迷惑・・・いえ、心配なさいますよ？」

秋葉はあきれて振り返る。しかし流花はにこにこしながら、

「様をつけるのやめなさいって言うてるでしょ？ささ、早く桶を一つ渡しなさいよ！」

と言いつつ言い終わらないうちに秋葉から桶を奪い取る。

秋葉は大げさにため息をついた。

「今は二人だけだからいいけど、本来あんたのことを流花なんて呼んだら首飛んじやうのよ??」

「私達友達でしょ? いいのよ別に。」

「なにがいいのよ・・・まあ手伝ってくれると嬉しいんだけど。」

「でしょでしょ？」

屋敷につくと流花は裏口へ回り込み窓から自室へ戻るのだが、今日は腹が空いたとわめき厨房までついてきた。

朝食の下準備は夜のうちに済ませてあるので、あとは火を加えるだけ。慣れた手つきで秋葉は簡単なおかずを作っていく。

「出来たわよ。早く食べて部屋に戻りな。」

「はい。」

名門静家のご令嬢がこれでいいのか・・・と秋葉は思う。

でもこの空気に居心地の良さを感じている。

矛盾する心に本日3度目のため息をついた。

それから数刻後事態は一変する。

「秋葉。流花に至急衣装を改め広間に来るよう伝えてくれ。」

秋葉は流花付きの女史めしつかいでもある。

ゆえに、流花に対する知らせはまず秋葉に通される。

さきほど流花の父に頼まれた伝言に何となく胸騒ぎがして、しぜん、早足になる。

流花の部屋に行くと流花は寝台に転がり書物を読んでいた。

「流花様。ご主人様がお呼びです。衣装を改め広間に来るようにと。」

すると流花は不思議そうな顔をして

「お父様が？・・・」

とつぶやき寝台からおりる。

手早く衣装を着替え流花は広間に入った。後ろを歩いていた秋葉は壁際に下がり頭を垂れた。

それを合図に流花の父、静せい 蠟ろうが流花に告げた。

「おまえを緑龍神候補として送り出そうと思う。」

周りから一切の音が消えた・・・。

第1章 初冬の花（後書き）

ところどころ意味不明ですが許してください・・・

第2章 開花

「そんなっ！！お父様？！嘘・・・嘘でしょう？嫌よ！！」

流花は沈黙を破り叫んだ。

「なぜだ？流花。神になれるんだぞ？」

「嫌よ！噂によれば緑龍神の寿命は50年。もっと生きられるかもしれないのにつ！」

「何を言う神で50年の人生と人間として80年生きるのを比べてみる。神であることの方がはるかに有意義だ。」

蠟は笑顔を崩さず、続けた。

「もう選定式に出れるよう取りはかった。決定事項なのだ。」

「そんな・・・」

流花は泣き崩れ、次の瞬間広間を飛び出して行った。

その後を秋葉が追う。広間を出る刹那、蠟の声が響く。

「出立は、明後日だ。支度をしてやれ。」

どこかで木菟が鳴いている・・・。

窓から流れ込む冷気に流花は軽くふるえる。

泣きすぎて目が痛い。ほおも冷気でひりひりする・・・。

「起きられましたか？」

扉の向こうで秋葉の声がした。

「ええ……。」

予想以上にかすれた声に腹が立つて勢いよく扉を開ける。

びつくりしたように、秋葉が流花を見る。

「……どうなさいました？」

無神経な言葉につい、

「どうもこうもないでしょっ！」

その言葉に秋葉はかなりの嘆きを感じ、そっと部屋に入り扉を閉めた。

「ねえ……流花。私もあなたについて行くわ。あなたが50年後に死んだ時、3年喪に服してからすぐに後を追うわ。だから、お願い。逃げないで。」

その言葉に流花はびくりと反応し、

「でも……私は神になんかなりたくない。そんな力をもらって何になるの？王と一緒に国を治めるの？黒龍国から離れて？きつともう故郷にも戻れない。降嫁のようなものじゃない！それに……私何も知らないの。この国のことや、政治のことか……。」

その言葉に秋葉ははっとする。

流花の家は、確かに名門である。が、流花は蠟の側妾の子だ。満足

な教育すら受けていない。

流花が神になって何をするというのだろうか？

不意に秋葉の胸に予感がよぎる。

しかし秋葉は流花を説得しなくてはならない。

蠟に命じられれば、従うしかないのだ。

（それが、光家わがいえの役目だもの・・・）

だから、私は言わなくてはならない。

「ねえ、流花。あなたに神にならないという選択肢は残されていないの。だから、私と行こう？あなたに必要なことは私がすべて教えるって誓うから。」

しばらくして秋葉は言った。

そのことばに流花はまっすぐに秋葉を見た。

その迷いのない、はつきりとした意志が見えたことに秋葉は驚く。

流花はゆっくり口を開いた。

「今。決めたわ。私、緑龍神になる。そして・・・静家を滅ぼす。私を苦しめたすべてのものを滅ぼしてやる。」

第2章 開花（後書き）

まだ龍がでてません。。。。
次回出せるといいのですが。。。。

第3章 出立前夜

「だから、私に教えて。あなたの知っているすべてを。」
その言葉に秋葉はうなずいた。

翌日から秋葉は流花に名門貴族にふさわしい教養を身につけさせるため、徹底的に自分の学んだことを教え込もうとした。が・・・

「まあ、わけ分かんない!!」

どつと机に倒れ込む流花。あと2日で最低限のことを教えなければならぬのに、なかなかかはかどらず秋葉も焦った。

「いい？まず、あなたのこの家での地位は第6位。第1位って言うのは当主である静 蠟様。そして第2位は蠟様と正妃である盟里様の間に生まれた長男。で、蠟様と盟里様はそのあと男児を2人、女児を一人お産みになつていてでしょ？それであなたのお母様は第1寵妃だから、その人の産んだ子は5番目の子と考えられる。それであなたは、第6位ってわけ。」

「ふーん。お母様って第一寵妃だったのね・・・。なんで父様に意見してくれなかったのかしら。」

ぽつりと流花はつぶやく。その言葉に秋葉はびくつとして流花を見る。

彼女の母親は、子供など欲しくなかったのだ。ただ、蠟といたかつ

ただけ。

だから流花の世話を秋葉に任せただのた。
蠟の命令に意見するどころか、喜んで従ったのだろう。

「まあ・・・今となつてはどうでもいいじゃない。じゃあ、閑話休題として私のことを教えてあげる。」

「え？」

流花が首をかしげた。その反応に上手く話題をそらせたと秋葉は安堵し、話を続けた。

「まず、私の家について。私の家の名前は光家^{みつけ}って言って、静家に代々仕える家柄なの。男女問わず正妃以外の女性から産まれた者は静家の侍従や衛兵、女史としての教養を積み、静家に送られるの。私の母は、第4寵妃だったから、産まれた瞬間から静家に送られることが決定してたわけ。母は・・・私が14でこの家に行く時、大泣きしてた。まあ、もう母が死ぬ時くらいしか家に帰れないし・・・。当然だけど。それで4年間下働きして、15才のあなたの女史に抜擢されたわけ。」

「・・・なんか19年間の人生がものすごく短くまとめられててなんか拍子抜けしちゃった。」

流花はやつと笑った。

「ねえ、一つ聞いていい？」

しばらくして流花は、おもむろに口を開いた。

「緑龍国は・・・なぜ建国されたの？」

第3章 出立前夜（後書き）

なかなか話が進まず申し訳ありません・・・

第3章 続 出立前夜

緑龍国。

この国の共同建国は青龍国と黒龍国の長年にわたる戦いを終結に導いたように見える。しかし、これはただ、両国の争いが陰湿になっているという事である。

緑龍神の寿命を50年と定めたのも、両国の独裁を防ぎ干渉できるようにするために他ならない。

出立の日の前日、静家ではささやかながら宴が催された。

秋葉は、流花の侍女として遇され、久しぶりに楽の音に癒され料理に舌鼓を打った。

隣の流花もそれなりに楽しんでいるように見えるが、時折ふっと視線がさまよう。

そんな流花を見ていられなくて、秋葉は流花に膝にそつと手を置いた。

「・・・流花、大丈夫。私がついてる。」

そつとつぶやいて、秋葉は明日の荷物を確認したいと席を立った。

宴の部屋を出た秋葉は自室へ戻り、近くの寝台に腰を下ろした。

知らず昨夜の出来事がよみがえってくる。

- 昨夜。

流花を寝かし、自分も夜着に着替えようとしていた時、なじみの女史が秋葉に蠟からの伝言を運んできた。

こんな真夜中に・・・と思いつつ、蠟の部屋へ向かうと蠟ともう一人寄り添うように女性が座っていた。

よくよくみれば第一寵妃流花の母だった。

「遅くにすまなかったな。」

席についてまもなく蠟は切り出した。

「折り入ってそなたに頼みたいことがあるのだ。」

「はい・・・。」

「流花をなんとかしても緑龍神にして欲しい。」

「・・・は・・・？」

「私は、そなたを通して流花に文を出そうと思う。」

「なぜ「次の王位・龍位継承に決まってるじゃない。」

秋葉の言葉を遮り流花の母が怒ったように言った。

「さよう。黒龍王から内々に打診があった。そうすれば我が家は、一気に序列を3位にあげてくださるそうだ。」

「はあ・・・。」

では、やはり流花は家のために利用されるのか・・・

秋葉の心に怒りが渦巻く。

「同行者はそなたしか許されていない。頼めるのはそなただけなのだ。光家の娘よ。」

そういわれれば、秋葉に逃げ道はない。ただうなずき、部屋を後にした。

「私に何をしろっていうのよ・・・」

今更ながら、流花の母は流花への伝言どころか話題さえ出さなかった。

娘を道具としか考えていなかったのだろうか・・・。

『あなたは、静家の当主様の命令には何があっても従いなさい。それが光家として仕えると言うことです。』

（はい・・・母様・・・でも、感情をこんなにも殺して従わなくてはならないの??）

心の中で何度つぶやいても答えは返ってこなかった。

そして、夜が明け、ついに秋葉と流花は迎えに来た使者達とともに黒龍国の郊外、緑龍国となるべき場所へ旅立った。

第3章 続 出立前夜（後書き）

長らく放置していてもすみません・・・。
読んで下さってありがとうございます

第4章 街へ

黒龍国の首都への交通手段は馬である。

黒龍一族は、伝統的に黒龍山にすんでいるため街へ行くには馬を使い山を下りなければならず、かなり道も悪いため肉体的にかなりの負担になる。

また、道中獣や盗賊の襲撃を警戒しなければならず、快適とは言い難い。

灼けるような日射しの中、秋葉は流花の輿に馬を寄せた。

「流花様。お加減の方はよろしいですか??」

「なんで家を出てから急に侍女らしくなッてんの??」

「隊列の者は、私の存在をご存じない方が多いのです。ここでなれなれしい態度を取ってしまうと、流花様が侮られます。」

輿の中にいる流花は日射しをしのげるとはいえ、湿度が高くなる。

そのため夜明けとともに野営地を出発しても昼を過ぎる頃には前髪が額に張り付き扇が手放せない。

「もう少し涼しくはならないの??これじゃあ、街へ行く頃には死んでるわよ!!」

「もうすぐ夕方ですから今を乗り切れれば涼しくなります。我慢して下さい。」

「でも、街についても、郊外までまた行かなきゃいけないんでしょう??めんどくさいったら。」

「いいえ。選定式は、黒龍国の首都に近い場所で行われるそうですからそれなりに待遇もいいはずですよ。青龍国の候補者の方も、このような天気では大変でしょうね。」

「そんなことないわ。青龍国の山は深いし青龍神に守られてるから快適よ。きつと。」

流花の言葉に、秋葉はびっくりとした。

・・・確かに、噂はある。今の青龍神は政治にはあまり関心が無いが、一応優しさはあるらしく、無事故で山を越えられた様子を見るとあながち間違いではないらしい。

黒龍神は、王がろくでなしらしくいつも忙しいという話を聞いたことがある。こんな所にまで手が回らないのもうなずけるが・・・。

「秋葉殿。野営地に着きました。これから支度をいたしますので、流花様とこの近くを散歩なさってはいかがでしょうか？護衛はきちんとつけますので。」

物思いを断ち切るように、先ほどの会話を聞いていたらしい武官が、気を遣って秋葉に提案した。

「ええ。そうしましょう。ありがとうございます。じゃあ、輿をお降り下さい、流花様。」

「やっと降りれるのね！もううんざりよ、この中！！！」

ぶんすかしている流花を見て秋葉は短く溜め息をついた。

この旅が始まってから、流花は“わがままで短気なお嬢様”イメージが張り付いてしまった。

性格が変わってしまったのである。

このままでは、武官達の信頼も失ってしまう。

そう考えれば、ここでじっくり話した方がいいかもしれない。

第4章 街へ（後書き）

またまた放置して申し訳ありません・・・
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4535g/>

アジアンブルー～通条花と緑泥石～

2010年10月15日08時06分発行